

水族館へ行こう!

京都大学白浜水族館

70

大和茂之

オキアミやアミという名前を聞いたことがある人は多いと思う。オキアミは南極海のクジラの餌として有名であるし、アミはつくだ煮にして食べることがある。白浜水族館でも、飼育生物の餌として大いに利用している。水族館の餌の時間の後、水槽に残っている白いオキアミの破片を見て「何?」と質問されることもよくある。

な体をしているが、アミ目、オキアミ目として分類され、エビやヤドカリ、カニなどを含む十脚目と対等の分類群である。胸部には、歩脚やハサミ足を発達させることなく、二又に分かれた細い足が並んでいる。アミは主として内湾などの沿岸に多い。大きさもアミはせいせい1センチ程度であるが、オキアミは数センチになる。両者の一番の違いは、子どもをどのステージで放出するかである。オキアミは3対しか足のないノープリウス幼生を放出するが、アミは雌の腹部に保育室をつくり、成体とほぼ同じ足の数を持つマンカ幼生を放出する。アミ類の英語名はオポッサムシユリンプと呼ばれるが、有袋類のフクロネズミになぞらえているのだらう。

ある。なによりも身近なところでは、魚釣りの餌として用いられる。白浜水族館でも、飼育生物の餌として大いに利用している。水族館の餌の時間の後、水槽に残っている白いオキアミの破片を見て「何?」と質問されることもよくある。

の。水族館の餌の時間

卵を保育室に抱いて、親とほぼ同じ形で放出するものとして、フナムシやヨコエビなどをこの連載で取り上げてきた。これらはプランクトンの時期を経過しないことから、水族館の中でも一生を完結できる。アミ類も、意図して飼育しているわけではないが、いくつかの水槽で自然にわいてくる。201号の「サンゴの水槽」や304号の「泥底の動物」の水槽などで、目を凝らせば観察できるが、これらのアミの正確な種名はよく分かっていない。オキアミもアミも、特に注目しなければ見過ごしてしまいそうなる生物だが、甲殻類全体を理解する上では重要な位置を占めている。魚釣りをするとき、体のつくりを眺めてみてはいかがだろうか。

(京都大学助教)

オキアミとアミ



△ 釣り餌としておなじみのオキアミ(左)とアミ

エビのようでもエビではな